

こんな採用担当ご勘弁

就活終えた学生の声 ②

学生には面接官は「生殺与奪の権利を有する怖い人」です。採用担当者は緊張を解きほぐすアイスブレーキングを待ち時間に組み込むなどの工夫をしています。会社は受容的・共感的な態度で接するように面接官に指導しています。

そんな努力を台無しにするのが、部長や役員クラスの面接。学生の親よりも上の世代が多く、価値観を押し付けがちです。

「馬鹿にしないでよ！」

私立大学の女子学生が遭遇した大手メーカーの現場部長。入社してやりたいことを聞かれ、「人々の生活を新しい価値で豊かにしたい」と答えると、半笑いで「人々って誰？」「豊かにしたいって今の社会は豊かじゃないの？」と言われました。馬鹿にされたようで悔しくなりました。

抽象的な回答だったかもしれませんが、面接の目的は学生の潜在力を見つけ出すこと。言葉尻をとらえて攻撃しても始まりません。

「威圧的な役員がずらり勢ぞろい」

100年以上の歴史をもつ専門商社の最終面接。部屋に入ると貫禄ある50代の男性役員が5人、一列に並んでいました。彼らの椅子は黒い革張り、こちらはいかにも安そうな折り畳みで机もない。全身をジロジロと見られているようで、尋問を受けているようないやーな空間でした。



これはセッティングした人事側にも問題がありそうです。5人もの役員が最終面接に登場する意味は何なのでしょう。それでなくても緊張する最終面接。人数も含めて役員の人選は慎重に。せめて椅子と机くらいはまともなものを用意してあげてください。

「自慢話が長すぎる」

私立大の女子学生が受けた財閥系物流会社の役員面接。「海外赴任が長くてね、そりゃあ苦労したもんだよ」。延々と若いころの武勇伝を語り始めてしまいました。「中東に赴任した時なんかはね、現地の秘書から結婚したいって言われて困ったもんさ、ハッハッハッ〜」。困っているのは私なんですけど。

威圧的な面接官に比べれば、まだ救いのある可愛い話ですが、面接の目的を果たしているとは言い難いですね。ひょっとしたらこの役員、面接を息抜きの場合だと勘違いしているのでしょうか。

頑固で偏屈な部長や役員をコントロールすることも採用担当者の大事な仕事。せっかく最終段階まで残ってくれた優秀な学生を逃がしてしまっただけでは、それまでの苦労が水の泡です。次回は中小・ベンチャー企業の採用担当者に取りがちな事例をご紹介します。

(パフ社長 釘崎清秀)

役員、価値観押しつけ／面接で息抜きも